



## 「新教養の気象学」

日本気象学会編

1998年, 朝倉書店, 144ページ,  
定価3,600円

本書のまえがきには「本書は初学者のための気象学の教養普及書である。事典とは異なり項目を網羅してはいないが、基本的で重要な項目について、……著者一人一人の生きた言葉で丁寧に解説してある。」の一節があるが、著者はすべて現役で、大学の先生が5名、気象庁の予報関係者が5名の合わせて10名の方々によって、最新の各分野の知見が以下のようにまとめられている。

1. 地球と惑星の 대기
2. 放射と気温
3. 大気の運動の仕組み
4. 雲と降水
5. 地球を巡る大気の流れ
6. 天気変化の舞台裏
7. 身近な大気の運動—局地気象
8. システムとして進化する天気予報
9. 気候変動と地球環境問題

このように、太陽系の中のすばらしい水惑星「地球」から始まり、その地球大気の様々な振る舞いを中心に述べた各章が続き、最後にかけがえのない地球の環境問題を取り上げている。

本書は気象にかかわる各分野をコンパクトにまとめた気象の総合書であり、これから気象の道へ進もうと考えている人、特に気象予報士を目指す人にとっては最適な気象の入門書である。通学、通勤途中の電車の中などでも気軽に読める程の大きさと重さである。

さらに、予報現場に現在たずさわっている方々にもお勧めしたい。私のように多年にわたって予報現場にいと、目先の天気予報のあたりはずれや、数値予報やガイダンスなどの予報資料の精度ばかりを論じて、

大気大循環や放射の問題を含めた気象学の根本を忘れがちになってしまっている。

現代の予報資料の大部分は、コンピュータによって客観解析された画情的なのものが主体で、昔の予報官がおこなっていた「天気図を解析して現在の天気とその変化を予測する」というような“夢”がなくなっている。極端に言えば、現在の天気予報や気象解説は数値予報やガイダンスなどが見えれば（読めることではない）、その日その日を過ごせる時代になっている。

しかし、予報者や気象解説者が、日々目の前を通り過ぎてゆく各種スケールのじょう乱の立体構造とその変化について、各種の気象資料と自分がかつた気象知識とを総合して理解することが予報精度の向上につながる。特に、予報の外れたときには、その事後において“なぜはずれたのか”について、関連するじょう乱の構造とその変化を読み取っておくことが重要で、このことこそが、現代の予報者に残された“夢”である。すなわち、予報のはずれた理由は、事前と事後の各種予報資料の中に必ず隠されている。これを探し出すためには基礎的な気象知識が必要であり、このことを実行することで予報者の“夢”がかなえられ、予報技術が向上する。周囲を見渡すと、残念ながらこのような人たちは年々少なくなっているのが現実である。

前置きが長くなったが、本書には、気象知識の基礎的な面も応用を交えて書かれており、気象庁や民間の気象会社などで仕事をして、すでに予報や気象解説のベテランの方々の再教育に役立つと思われるので、そのような方々にも是非読んでいただきたい。また、本書の末尾には、更に進んだ気象学を目指す方々のために、多くの参考書を詳しく案内してある。

なお、「ひまわり」の打ち上げ以来、衛星の雲画像解析に関係した者として注文すると、大気の流れをダイナミックに示す「ひまわり」の水蒸気画像を1, 3, 5項等で利用していただきたかった。

(日本気象協会 黒田雄紀)